

浅草喜劇人銘々伝

1

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

曾我廼家五九郎篇①

浅草寺境内の蕎麦山の一面に喜劇人の碑があり、そこにはエノケンこと榎本健一や吉川ロッパをはじめとする浅草ゆかりの喜劇人たちの名が刻まれている。その左側にあるのが、明治45年から昭和12年まで25年間にわたって浅草で喜劇の一座を率い、浅草に喜劇を根付かせた曾我廼家五九郎の顕彰碑で、当たり役「ノンキナトウサン」に扮した五九郎の姿が描かれている。ズングリとした小太りの体型、羽織姿に帽子をかぶり、大きな団子つ鼻、ちよび髭、丸メガネ。見るからに風采の上がらない五九郎がエノケン登場以前の《浅草の喜劇王》に上り詰めることができたのは何故なのか。

五九郎の本名は武智政平。明治9年4月12日、農家の長男として徳島県麻郡鴨島町に生まれる。劇作家の武智鉄二の父とは従兄弟同士であり、喜劇俳優のフランキー堺は甥にあたるという。やがて藩閥専制政治に対抗する自由民権運動に感化されて14歳で東京へ、板垣退助邸の玄関番を半年ほど務めたのち、壮士としての弾圧を避けるために大

阪の中江兆民の許に身を寄せ、自由民権運動を芝居に組み込んだ角藤定憲の壮士劇の一座に入って初舞台を踏む。福井茂兵衛の一座にもいたようだが、時流を嗅ぎとる力や行動力には長けていたものの役者として評価されることはなく、汽車の中での雑誌売りなどをして食いつないだ。

明治40年の春、新富座で曾我廼家兄弟劇の東上公演を観て、観客を笑わせる喜劇に将来性を見出し、一座に入ってもらった。歌舞伎出身で曾我兄弟から曾我廼家五郎と十郎を名乗った二人が明治37年2月に大坂・浪花座で我が国で初めての喜劇専門劇団を旗揚げしてから3年後のことだった。五郎から十郎の名を許されたが、ここでも役者としては芽が出ずに一座の不平等分と共に退座。明治43年7月に自ら座長となって東京の有楽座で公演を行っている。手元にある同年11月の品川座での興行の辻番付を見ると、五九郎一座ではなく《曾我廼家青年一派》と称していたことが分かる。五九郎の名では、まだ集客が難しかったからだろう。《愉快の親玉 滑稽の生粋》という兄弟劇の誤い文句をそのまま頂戴し、5本の演目のうちの3本が五郎と十郎の合作による芝居だった。

同年から翌44年にかけて横田商会のサイレント映画で主演を経て、明治45年に五九郎一座として浅草・帝国館に初出演。浅草六区の気取らない庶民層の観客に受けたことで、以降は音楽倶楽部・金龍館・常盤座、観音劇場など浅草の劇場に出演し続けている。ここから、本家の曾我廼家喜劇とは違う五九郎独自の喜劇作りが始まった。

まず、上方言葉を使わず東京言葉を使用した。歌舞伎から引き継がれた下座音楽と女形を廃して洋楽と女優を用い、



浅草寺境内に建立された曾我廼家五九郎の顕彰碑



五九郎がノンキナトウサンを演じた浪花座公演のマッチラベル

更に、「出てきただけでおかしい」と称された自らの持ち味を活かしつつ、五郎の作る教訓性や旧道徳性の濃い《涙と笑いの人情喜劇》とは全く異なる、社会性や風刺に富んだ庶民目線の喜劇を志向した。時流を嗅ぎとる力と行動力に、政治力やプロデュース力も加わり、浅草における五九郎の地位は盤石なものになっていく。(次号へ続く)

* 34頁の写真も併せてお楽しみ下さい。

西条昇の浅草喜劇コレクション

曾我廼家五九郎篇①

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ（P12-13）と併せてお楽しみ下さい。



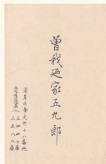
五九郎が座長格を務めた明治43年11月の品川座での曾我廼家青年一派の辻番付。



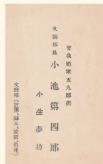
大正11年2月に五九郎新報社が発行したファン向けの冊子「五九郎アルバム」の表紙。



大正14年8月の浅草・凌雲座での曾我廼家五九郎劇の筋書。漫面劇『続ノンキナトウサン』が上演された。



五九郎と五九郎劇の文芸部長であった小生夢坊の名刺。



西条 昇 江戸川大学教授、喜劇史研究家。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

